

過疎地域の過疎化の改善と子ども教育

3年2組24番 西木 和花

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染が拡大している中、子ども教育の形は大きく変わっている。対面での授業が難しく、小学校や中学校でもオンラインでの授業が広く導入されるようになった。国際高校でも、タブレットを使った授業が導入され、新型コロナウイルスの感染者数が急増している際にはオンライン授業が実施された。しかし、リモートが普及しているとはいえ、全員が平等に授業を受けられているのかと疑問に思った。特に田舎の地域では都市部に比べ、最新技術の取り入れが遅いイメージがあり、自分が住んでいる奈良県の教育現場の変化に焦点を当てた。また、タブレットを使うことで学力の向上はできるのか、自分自身がタブレットを使っていることもあり興味をもった。

2. 序論

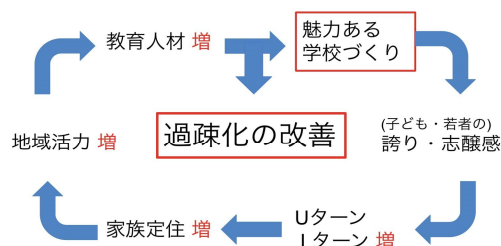
教育はすべての人が同じように受けるべき基本的権利である。しかし、世界には学校に通えていない子どもは約3億人を超えている。その多くは発展途上国に集中していて、初等教育就学率（小学校に就学している割合）が80%を下回る地域も少なくない。

日本のような先進国にも様々な理由で平等な教育を受けられていない子どもは多くいる。その要因のひとつが過疎地域である。そもそも過疎地域とは「人口の著しい減少に伴って地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域と比較して低位にある地域」と定義されている。奈良県では十津川村、川上村、宇陀市、山添村、曾爾村、御杖村、五條市、吉野町、下市町、黒滝町、天川村、野迫川村、下北山村、上北山村、東吉野村の15の市と村が該当する。過疎地域での教育を「へき地教育」と称されることもある。へき地教育の最大の弱点は生徒、教師共に人数が少ないことであり、1学年に生徒が10人にも満たない学校もある。そのため、1人の教師が複数の学年の授業を同時にする、複式教育が広く取り入れられている。複式教育は一人ひとりに合わせた授業ができるが、集団で培われるコミュニケーション能力や調和性などの社会的な経験をする機会が不足しやすい。さらに、付近に小中学校が少なく、コロナ禍になってから他校と交流する機会が減ってしまっている。文部科学省が全国の小中学生を対象に実施した学力テストでは、地域別平均点で過疎地域が最も低いことが明らかになった。過疎地域では都市部に比べ、国から支給される予算が少なく学校の施設が不十分な点もあり、学力向上には少し不利なのではないか。

文部科学省はGIGAスクール構想という教育改革案を2019年に発表した。GIGAは「Global and Innovation Gateway for All」の略で、「すべての児童・生徒にグローバルで革新的な扉を」という意味が込められている。この改革案の目的は、子どもたち一人ひとりに対して個別最適化された創造性を育む教育の実施や、情報通信や技術面を含めたICT環境の実現である。具体的には、児童生徒1人1台の学習用端末やクラウド活用を踏まえたネットワーク環境の整備を行い、個別に最適化された教育の実現を目指している。GIGAスクール構想は過疎地域でも取り入れられていて、小中学生にも一人一台タブレットが準備されている。タブレットを使って他校や外部の人と交流したり、タブレットで課題に取り組んだり、プログラミングの授業が多く取り入れられるなど、幅広く活用されている。

過疎地域では地域との交流が深い学校が多い。自身の地域について知る体験活動の授業を「ふるさと学習」という。ふるさと学習の目的はふるさとの自然、文化、歴史からふるさと

について学び、人々との触れ合いを通して地域・人に対する思いやりの心を持つことである。そしてふるさとを愛し、誇りに思い、地域を支える次世代を育成する。地域に寄り添った学校に変えていくことで、UターンIターン増加率に効果があったという先行研究がある。Uターンとは地方出身者が都市部へ移住したあとで、再び地方へ移住することで地方出身の学生が都会に移住し、就職を機に地元に戻ることである。また、Iターンとは都市部から地方へ転勤や転職で移住することである。下の図は先行研究より引用したものである。



島根県・海士町で島唯一の県立隠岐島前高校では地域起業家的人材を育成する新コースを設置したり、地域の人々と協働して学んでいく環境の整備を実現した。その結果、地元の子どもたちの大半が隠岐島前高校に進学希望するようになったり、島外からの親子での教育移住、家族連れのUターン、Iターンが増加し、廃校寸前だった生徒数は回復し、島の人口も増加に転じた。この前例から学校と地域の密着化は過疎化の改善に繋がり、人口増加から学力向上に繋がられるのではないかと考えた。

3. 本論

私は2回、本校の生徒にアンケートを実施した。1度目は探求週間でプレゼンテーションをした後に以下の3つの質問をした。

[1回目]

①現在、全国の小中学校で一人一台タブレットが支給されているが、ICT教育で子どもの学力は向上するだろうか？また、どのような使い方が効果的だろうか？

②奈良県についてのPR動画を作ることになったら何をアピールするか？

③将来奈良県に戻って暮らしたいと思うか？またその理由は？

《結果》

①6割の人が向上しない、4割の人が向上すると答えた。

〈向上しない〉

- ・目が悪くなる
- ・読み書きの能力が低下するのでは
- ・ゲームやSNSが簡単にできるようになる

〈向上する〉

- ・授業を録画して見返せるようにする
- ・教科書に載っていないことを調べることで検索力が上がる
- ・一人一台ではなくICTルームで調べ学習をする

個人的にも小中学生が1人ずつタブレットを持つというのは危険だと思う。タブレットは教科書よりも重さがあるし、簡単に検索ができるようになると思考力の向上を阻害していると感じる。全体を通して、使う時、場所、時間など大人がきちんと管理できるならば、学力向上に効果的なのではないかという考えに至った。しかし、新型コロナウイルスの影響で教員

の仕事が増えていることなどを考慮すると、きちんと大人が管理することは現実的ではないだろう。

②・治安が良い

- ・住みやすい環境と自然
- ・奈良公園、鹿、大仏、寺のような伝統的な文化
- ・柿の葉寿司などの郷土料理

という解答があった。これらの特徴は奈良に住んでいる人なら1度は感じたことがあると思う。しかし、「ふるさとを愛し、誇りに思う」には少し遠いのではないかと感じた。

③結果は下の図の通りだった。

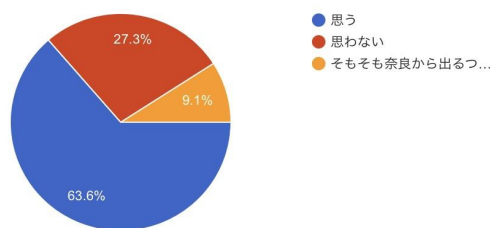
〈奈良に戻りたい〉

- ・1番馴染みのある場所で暮らしたい
- ・奈良が平和だから
- ・大阪や京都など都市に行きやすいから
- ・災害が少ないから

〈奈良に戻りたいとは思わない〉

- ・働き口がない

将来、奈良県に戻って暮らしたいと思いますか？



この結果より、馴染みのある地元でも働く場所がなければ過疎化の改善には繋がらない可能性があるということがわかった。

[2回目]

2度目は全校生徒を対象に以下の質問をした。

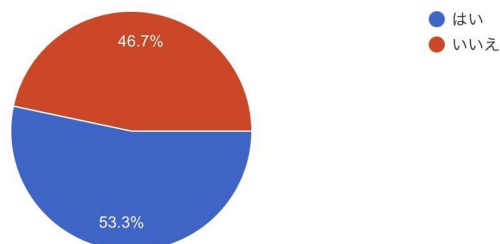
- ①奈良県の過疎問題について考えたことはあるか？
- ②学力の伸びやすさと住んでいる地域は関係があると思うか？
- ③現在、全国の小中学校で一人一台タブレットが支給されているが、ICT教育で子どもの学力は向上するだろうか？また、どのような使い方が効果的だろうか？
- ④過疎化の改善には地域と学校の連携を強くすることが重要である。国際高校がもっと地域に密接した学校にするためにはどんな取り組みが必要か？

《結果》

①過疎問題について考えたことがあると答えた人は僅か1割程度で、ほとんどの人が過疎問題にあまり関心がない、または、そもそも過疎問題を知らないという現状が明らかになった。過疎問題はまだまだ注目度が低い。少人数ではどんな課題でも解決は難しいと思う。まずは過疎問題に関心を持ってもらうという根本的な課題があることが分かった。

②アンケートの結果は下の図のとおりである。

学力の伸びやすさと住んでいる地域は関係があると思いますか？



その理由は

- ・塾や学校などの設備の充実度
- ・都市部の塾のほうが優秀な先生が多い
- ・人が多いほうがお互いを高めあえるのではないか
- ・周りの環境で勉強の意欲が変わる

などがあった。

③1回目とは異なり、8割の人が向上しない、2割の人が向上すると答えた。

〈向上しない〉

- ・正直、高校でも意味があるのかわからないし、タブレットで遊んでしまうと思う
- ・タブレットに頼って、先生に聞いたり、教科書を読んで理解するということをしなくなってしまふ
- ・紙に書いた方が伸びる

〈向上する〉

- ・楽しく学ぶことができる
- ・授業で使うアプリやサイトは授業以外では使えないようにして学校が管理・制限をする
- ・グループワークに使う

1回目と同じように学校、教師による管理の徹底が必要であるという意見が多かった。

④

- ・挨拶を積極的にする
- ・ボランティアなどの地域行事に参加する
- ・地域の人と関わる行事を開催する
- ・近くの学校や保育施設と交流を持つ

行事の開催をすぐに実現することは難しいが、地域行事に積極的に参加するなど地域に歩み寄っていくことが必要だと思った。

4. 結論

国際高校の生徒に実施したアンケートから過疎問題への関心の低さという新たな課題を発見した。地域間の格差はGIGAクール構想の取り組みにより少なくなっているように思う。しかし、すべての小中学校に完全に整備ができていないわけではない。全員が平等な教育を受けるのはまだまだ難しい。タブレットを使うことで学力が向上するの点では、この研究では明らかにできなかった。人によって意見が全く異なり、これだけの人数の意見だけでは結論はだせないと感じた。実際に小・中学校でタブレット授業を受けている生徒に学力を実施し、数値的な推移を調べる必要があると思った。さらに、タブレットをどのような用途で使うと効果的なのか、検討していかなければいけない。また、生徒が主体となった地域振

興は若者の地域に対する関心を高め、地域の貢献につながる。そうすることで、Iターン・Uターン人口が向上し、未来を担う若者人口の増加が期待できる。しかし、地域に定住する人を増やすには、働く場所の拡大も考えていかなければいけない。この研究から、学校を核にした地域づくりは持続可能な社会への第一歩だということがわかった。

5. おわりに

グローバル探究がきっかけで、過疎地域について深く知るようになったが、それまでは自分もあまり過疎問題に注目したことはなかった。この研究を通して、過疎問題が自分にとってそれだけ身近な問題なのか知ることができた。自分の研究を生かして、過疎問題の拡散、タブレットの活用方法の提案、若者世代が中心となり地域の方との交流が可能なイベントの開催など、私達のふるさとの活発化に貢献していきたいと思う。

6. 参想文献

清水宏吉. 学力の地域格差. 学力の地域格差(2022, 7, 15)

https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoiku_kakusa/2008/pdf/data_03.pdf

徳島県県庁コールセンター. 過疎地域とは. (2022, 7, 15)

<https://www.pref.tokushima.lg.jp/FAQ/docs/00027304/>

奈良県ホームページ. 過疎市町村の紹介. (2022, 10, 21)

<https://www.pref.nara.jp/23444.htm>

岩本悠. 魅力的な「学校」づくりを通じて持続可能な地域をつくる。学校魅力化プラットフォーム. MACHI LOG. (2022, 10, 10)

<https://machi-log.net/60568/>

作野宏和. 過疎地域の実態と解決すべき課題. 平成30年度 第3回過疎問題懇談会資料. (2022, 7, 15)

https://www.soumu.go.jp/main_content/000596224.pdf

文部科学省. GIGAスクール構想の実現について. (2022, 10, 1)

https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm

松田孝一. へき地教育の現状と課題. (2022, 7, 10)

<https://www.meiji.ac.jp/shikaku/kyoikukai/6t5h7p00000if2mm-att/011bunkakai.pdf>

月ヶ瀬小中学校. GIGAスクール. 令和3年度の本校におけるICTの活用. (2022, 7, 12)

<http://www.naracity.ed.jp/tsukigase-e/index.cfm/1,5240,35,782,html>